

土井ノ内遺跡・鍛冶屋敷遺跡

—平成6年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1995

(財)山口県教育財団

山口県教育委員会

序

近年、農業基盤整備事業等の進展に伴い、県下各地の埋蔵文化財が掘り起こされる機会が増加してまいりました。

私たちの郷土山口を築いてきた先人の長い営みを今に伝える数多くの歴史的遺産を、こうした工事から保護し、併せて、開発と文化財保存との調和のとれた県土づくりを旨として、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業施行予定地区に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成6年度は、豊浦郡菊川町大字上田部に所在する土井ノ内遺跡・鍛冶屋屋敷遺跡の発掘調査を行い、当時の人々の生活文化の実態を知る上で、貴重な手掛かりを得ることができました。この発掘調査の成果をまとめた本書が、学術研究や教育の資料に利用されることはもとより、広くふるさとづくりの基礎資料として活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々、および関係各位に対して、深甚なる謝意を表します。

平成7年3月

財団法人山口県教育財団	理事長	高浜	哲
山口県教育委員会	教育長	高浜	哲

例 言

1 本書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成6年度に実施した土井ノ内遺跡・鍛冶屋屋敷遺跡（山口県豊浦郡菊川町大字上田部）の発掘調査報告書である。

2 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団

山口県教育委員会（山口県埋蔵文化財センター）

調査担当 財団法人山口県教育財団事務局指導主事 寺田勝夫

花岡隆義

山口県埋蔵文化財センター文化財専門員 岩崎仁志

3 調査にあたっては、山口県農林部耕地課、山口県下関土地改良事務所、地権者をはじめとする地元関係各位から多大な援助・協力を得た。

4 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「田部」を複製使用したものである。

5 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）の北で表示し、標高は海拔標高(m)で示した。

6 出土遺物のうち陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長 大橋康二氏および山口県立美術館学芸専門監 榎本 徹氏の指導・助言を得た。

7 本書に使用した土色の色調の標記は、農林水産省農林水産技術会議事務局編『新版 標準土色帖』に従った。

8 本書の図版における遺物番号は、挿図の遺物番号に対応する。

9 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SB：建物跡 SD：溝 SK：土坑 SP：柱穴 SX：その他の遺構

10 本書に掲載した実測図・写真の作成および執筆は寺田・花岡・岩崎が協同で行い、岩崎が編集した。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	土井ノ内遺跡の調査	7
	1 遺構	7
	(1) 弥生時代の遺構	7
	(2) 中世・近世の遺構	9
	2 遺物	18
	(1) 弥生時代以前の遺物	18
	(2) 中世・近世の遺物	20
IV	鍛冶屋敷遺跡の調査	24
	1 遺構	24
	(1) 弥生時代の遺構	24
	(2) 中世・近世の遺構	24
	2 遺物	30
	(1) 弥生時代の遺物	30
	(2) 中世・近世の遺物	30
V	まとめ	34

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第19図	弥生土器実測図(2)	20
第2図	土井ノ内遺跡 調査区設定図	4	第20図	弥生時代以前の石器実測図	20
第3図	鍛冶屋敷遺跡 調査区設定図	4	第21図	中世・近世の土器・陶磁器実測図	21
第4図	土井ノ内遺跡遺構配置図	5・6	第22図	大甕実測図	22
第5図	土井ノ内遺跡等高線測量図	7	第23図	鍛冶屋敷遺跡遺構配置図	23
第6図	弥生時代の遺構実測図(1)	8	第24図	鍛冶屋敷遺跡等高線測量図	24
第7図	弥生時代の遺構実測図(2)	9	第25図	掘立柱建物跡実測図(1)	25
第8図	弥生時代の遺構実測図(3)	10	第26図	掘立柱建物跡実測図(2)	26
第9図	掘立柱建物実測図	11	第27図	溝実測図(1)	27
第10図	溝断面実測図	12	第28図	溝実測図(2)	28
第11図	中世の土坑実測図	13	第29図	井戸実測図	28
第12図	近世の土坑実測図(1)	14	第30図	土坑実測図(1)	29
第13図	近世の土坑実測図(2)	15	第31図	土坑実測図(2)	30
第14図	SK14~22実測図	16	第32図	弥生時代の遺物実測図	30
第15図	埋甕遺構実測図	17	第33図	中世遺物実測図(1)	31
第16図	SX01土器出土状況図	18	第34図	中世遺物実測図(2)	32
第17図	縄文土器実測図	18	第35図	中世遺物実測図(3)	32
第18図	弥生土器実測図(1)	19	第36図	近世遺物実測図	33

図版目次

図版第1	土井ノ内遺跡遠景、土井ノ内遺跡調査区全景
図版第2	土井ノ内遺跡調査区南東部、土井ノ内遺跡調査区南西部
図版第3	SK79土層断面、SK79完掘、SK70、SK72土器出土状況
図版第4	SK71土器出土状況、SP04土器出土状況、SK74土器出土状況
図版第5	SB01、SB02、SB03、SK84土器出土状況
図版第6	SK05、SK40粘土層検出状況、SK46、SK03遺物出土状況
図版第7	SK32遺物出土状況、SK44、SK49、SK75
図版第8	SK08、SK07、SK41、SX01土器出土状況
図版第9	SX02・03(検出状況、埋甕出土状況、埋甕断ち割り状況、完掘)、SX06埋甕
図版第10	SX04(検出状況、埋甕出土状況、埋甕断ち割り状況、完掘)
図版第11	SX05(検出状況、埋甕出土状況、埋甕断ち割り状況、完掘)
図版第12	鍛冶屋敷遺跡遠景、鍛冶屋敷遺跡調査区全景
図版第13	SD09(北から、南から)
図版第14	SE01(土層、完掘)、SE02(完掘、木材出土状況)
図版第15	SK20、SK01、SK18、SK19
図版第16	SK11、SK09、SK27、SK12
図版第17	土井ノ内遺跡出土遺物(1)
図版第18	土井ノ内遺跡出土遺物(2)
図版第19	土井ノ内遺跡出土遺物(3)
図版第20	土井ノ内遺跡出土遺物(4)
図版第21	鍛冶屋敷遺跡出土遺物(1)
図版第22	鍛冶屋敷遺跡出土遺物(2)
図版第23	鍛冶屋敷遺跡出土遺物(3)
図版第24	鍛冶屋敷遺跡出土遺物(4)

I 遺跡の位置と環境

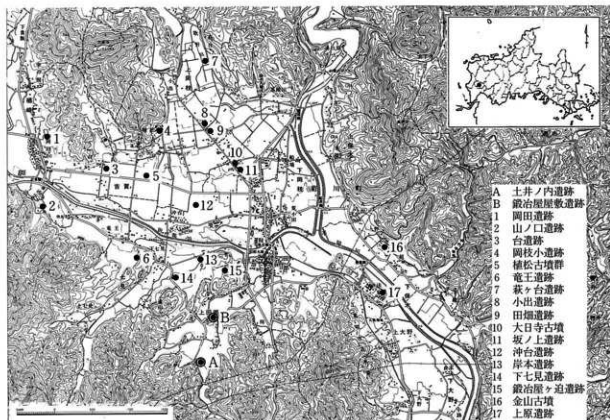
本遺跡は豊浦郡菊川町に所在する。菊川町は、県の最西部、豊浦郡の東南部に位置し、北の豊田町との境には、長門地方第一の高峰華山（標高約713m）がそびえ、山陰と山陽を分けている。菊川町の中心は、東西3.5km、南北1kmに及ぶ田部盆地（平均標高約15m）である。この盆地は、県内に数多く見られる、河川を伴う小盆地（山口盆地・西市盆地など）と同じもので、古代には条里制がひかれていたことでも知られている。河川は、この盆地の東側を木屋川、盆地中央を東西に、下関市内日地区を源とする田部川（別名菊川）が流れている。本遺跡は、この田部盆地の南端、上田部地区に位置している。

田部の名は、その名の通り、古代、朝廷の御料田を耕す部民が居住していたことに由来すると言われ、条里制がひかれていたことから、早くからこの地が開けていたことをうかがわせる。

中世には、長門国は荘園として地頭の管理下に置かれていたと言われ、現在の町内、上大野・下大野地区について、文明十年（1478）8月、大内政弘の書状に長門国豊東郡大野庄の名を見ることができ、詳細は不明である。

近世において、菊川町は清末藩に属し、萩～赤間関を結ぶ赤間関街道の北道筋の中継点として栄えた。この道は、現在でも萩と下関を結ぶ最短ルート（長門市深川・俵山・西市経由）としてその重要性は変わっていない。

文化遺産として創建の古い寺社もあり、町の規模の割りに寺社の数は多く、往時の町の繁栄がしのばれる。華山には、仲哀天皇の殯葬（仮埋葬）の小祠がのこされている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

菊川町にはどのくらい古くから人が住んでいたのか必ずしも明らかではないが、現在の植松地区の山麓より掘斧（ハンドアックス）が発見され、旧石器人の存在をうかがわせる。しかし、はっきりと生活の痕跡が遺るのは弥生時代からであり、すでに数多くの遺跡が発掘調査された。

弥生時代、田部盆地は、響灘沿岸の弥生集落の人口増加の結果、分村というかたちで村を去った人々によって開発された。最初に田部盆地に入ってきた人々は、現在の下関市綾羅木（綾羅木郷遺跡）にいた人々で、彼らは、綾羅木川を遡り、田部川を下って盆地に入り、田部川をはさんで北の丘陵地と南の台地の上に集落を形成した。

もともと、田部川は、「荒ぶる川」として氾濫を繰り返し、その結果、南北に1km幅の肥沃な氾濫原をつくった。綾羅木の弥生集落から来た人々は、この肥沃な氾濫原で農耕を営み、小高い場所に集落を形成した。それらは現在、木屋川の支流歌野川がつくった扇状地である丘陵地に坂ノ上遺跡、盆地南辺の台地に下七見遺跡として確認できる。なお、この下七見地区やその周辺では、弥生時代の水田跡である岸本遺跡、付近の「寺中」と呼ばれる丘陵に、埋葬遺跡としての鍛冶屋ヶ迫遺跡を確認でき、「集落・生産活動の場・奥津城」という生活の舞台がそろうて知られる数少ない弥生時代の遺跡群を見ることができる。

また、現在の豊浦町中ノ浜（中ノ浜遺跡）から、移住してきた人々が営んだと思われる弥生の集落は、二つの集落を避けるようにして形成され、田部盆地の東南（木屋川沿岸）、現在の大野地区の上原遺跡として知られている。

これらの集落がこの盆地の三大集落であり、その後も中世にいたるまで、基本的にはこの三大集落を中心にしてこの盆地の歴史は推移した。

ところで、この田部盆地は、現在でも「小日本」と呼ばれている。この盆地の広さに驚いたという昔話に由来すると言われている。もともとは、響灘沿岸から移住してきた人々が、山を越えて盆地を眺めたときの感動の記憶が、そのような昔話をつくらせたのではないだろうか。

なお、古墳時代の遺跡としては、歌野川の扇状地の南縁に植松古墳群、大野地区、木屋川の東岸の台地に金山古墳などがある。

中世に入るとこの三大集落の周辺においても生産活動が始まり、響灘と内陸を結ぶ、又山陰と山陽を結ぶ（特に木屋川は、現在の長門と西市を経て小月に至る塩運搬の水路として有名である）交易の中継点として発展し、新たな集落等も形成され、ほぼ現在の菊川町が形成された。江戸時代につくられた「地下上申絵図」を見ても、現在の町並みや道路と変わり無いことがわかる。

今回発掘調査した、土井ノ内遺跡、鍛冶屋敷遺跡は、そのような中世に形成された集落跡の一つである。地勢的には、田部盆地南縁の山地から発した小河川がつくりだした扇状地の扇頂部に土井ノ内遺跡、扇端部に鍛冶屋敷遺跡が位置する。なお、両遺跡とも一部に弥生時代の遺構・遺物も見られたが、これは、これらの遺跡が、下七見など弥生の大集落の影響のもとに成立し発展したことを推測させるものである。このような中世の遺跡としては、すでに萩ヶ台遺跡、田畑遺跡、山ノ口遺跡などが調査されている。なお今回調査した遺跡は近世の遺構・遺物も見られ、したがって弥生と中世から近世に至る複合遺跡という位置づけができるだろう。

II 調査の経緯と概要

山口県各地で推進されている県営ほ場整備事業は、農業生産基盤の整備を目指すものだが、同時に地下に眠る貴重な埋蔵文化財を破壊する可能性も高い。山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業対象地区内の埋蔵文化財を保護するため、あらかじめ遺跡の分布調査を行う。確認された遺跡については、現状保存を前提に山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存の困難な遺跡については、事前に調査し詳細な記録保存を行うようにしている。

上田部地区における県営ほ場整備事業は平成6年度に施行予定されたため、平成5年12月に分布調査を実施し、その結果広い範囲に文化財が眠っていることが判明した。この資料をもとに山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存の困難な2か所が発掘調査の対象地区になった。調査は財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受け、両機関が共同で行うこととなった。

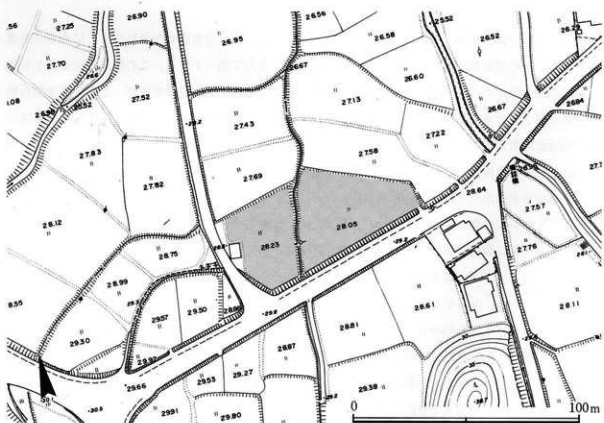
2か所の対象地区は直線距離で500mと離れ、地形的にも大きく異なっているため別の遺跡として扱った。南側に位置する調査区を土井ノ内遺跡、北側に位置する調査区を鍛冶屋敷遺跡とした。遺跡名については、土井ノ内遺跡がある地区の字名が竹ノ内ではあるが、道を挟んだ反対側が土井ノ内であり、そこから遺跡が続いていると考えられるためこの遺跡名がつけられた。また、鍛冶屋敷遺跡の方は、地区の字名は虎法師・宮ノ馬場ではあるが、俗に鍛冶屋敷と呼ばれていたためこの遺跡名がつけられた。調査面積はそれぞれ約5,200㎡、約2,400㎡で、平成6年4月26日から調査を開始した。

現地での調査は、まず、地層及び遺構の分布を把握するため、分布調査の資料をもとに土井ノ内遺跡に4本、鍛冶屋敷遺跡に5本のトレンチを設定し、人力で掘り下げた。この結果、両遺跡とも調査対象地区全域にわたり遺構が広く分布していた。次に、重機で鍛冶屋敷遺跡、土井ノ内遺跡の順に遺構面直上まで表土を除去した後、人力によって丹念に遺構を検出していった。検出した遺構は、まず鍛冶屋敷遺跡の方から掘り込みをした。新しい時代の遺構で大きいものから順次掘り込み、掘り込みが終了した遺構から随時遺構写真・実測を進めた。作業が進み梅雨を迎えると、周りの田や調査区を二分する水路から水が流れ込み、遺跡のほとんどが水没してしまった。水没していない所を掘り込み終ると同時に作業ができなくなった。このため、比較的水はけのよい土井ノ内遺跡の方へ移り作業をした。作業は順調に進んでいったが、夏を迎えると例年にない猛暑に見舞われ、土はコンクリートのように固く、さらに暑さも加わって、作業はなかなかはかどらなくなってしまった。この猛暑をどうにか乗り切り、9月中旬に土井ノ内遺跡の掘り込み作業は無事終了。再び鍛冶屋敷遺跡の方へ移り遺構の掘り込みを始めた。この作業と並行しながら、土井ノ内遺跡の残った遺構写真と遺構実測も進めていった。10月13日、絶好の天気恵まれ、遺跡全域の空中写真を無事撮影することができた。その後、残った溝・土坑を掘り込み、各遺構の写真撮影・実測を行った。11月2日、作業員の方々を始め、関係各位の多大な援助・協力により現地におけるすべての調査を終了した。

山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料を整理し、出土遺物の復元・実測を実施してこの報告書を刊行した。



第2図 土井ノ内遺跡調査区設定図



第3図 鍛冶屋敷遺跡調査区設定図



第4図 土井ノ内遺跡遺構配置図

Ⅲ 土井ノ内遺跡の調査

発掘調査を実施した範囲は、小字名では「竹ノ内」と呼ばれている。隣接する小字名が「土井ノ内」であることから、「館の内」の転訛地名である可能性があり、中世の武士居館の存在が考慮された。また一方では、地元でこの地区にかつて酒屋が存在したと言いつづけているため、酒造関連遺構の存在も考慮された。

調査の結果は、武士居館の存在については否定的であり、酒屋についてはその可能性を残すものであった。

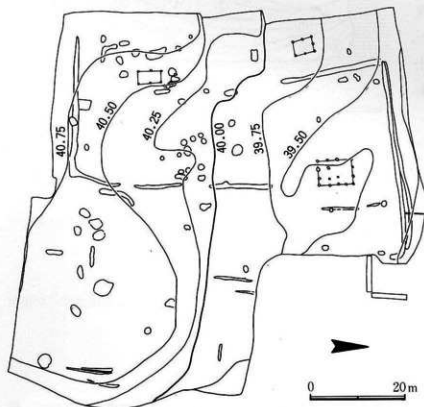
1 遺構

発掘調査によって検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟、土坑97基、溝15条、埋甕遺構5基、柱穴約1270個などである。遺構は弥生時代と中・近世の2時期のものであり、1000年以上の空白期間がある。遺構面は標高39~40mであり、南から北に向けてゆるやかに傾斜する（第5図参照）。後世の開墾にともない削平を受けているため、全般的に遺存度の低い遺構が多い。

以下、弥生時代の遺構と中・近世の遺構に分けて、主要な遺構について説明する。

(1) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は調査区南東側の比較的高い場所に集中している。この地区は微地形的には尾根筋の平坦面である。確認された遺構は不整形の土坑がほとんどであり、柱穴も存在するが、住居跡・墓は発見されなかった。



第5図 土井ノ内遺跡等高線測量図

土坑（第6~8図）

検出した土坑のうち、出土遺物により弥生時代の遺構であることが確認できたものは14基であった。そのほとんどが後世の削平を受け底面部がわずかに残っているものである。遺物量は少なく、投棄坑的なものはない。以下に代表的な土坑例を示す。規模等の概要については、第1表（土井ノ内遺跡土坑一覧）のとおりである。

SK79（第6図） 今回調査した土坑の中で最大のものである。直径約3.5m、深さ約1.24mの規模をもつ、

いわゆる貯蔵穴である。壁面はほぼ垂直で、部分的には下方で広がる。底面は平坦であり、掘り込みはない。埋土中から土器片とともに石鏃・骨片などが出土した（第18図10～14、第20図25・26・29ほか）。なお、貯蔵穴と考えられる土坑は本例のみである。

SK70 甕口縁部が礫とともに出土した。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。

SK71 甕の口縁部や底部（第18図8・9ほか）および石鏃（第20図23）が出土した。埋土は暗褐色土の単層である。

SK72 2段に掘り込まれ、南側半分が最大で幅約80cmのテラス状になっている。埋土からは多数の土器片が出土したが、復元できる個体はなかった。また、鉄器小片が相伴している。埋土は暗オリーブ褐色土の単層である。

SK74 溝状の土坑である。底面から比較的多くの土器片（第18図16～20ほか）が出土した。

SK76 V字形に近い単軸断面をもつ土坑である。出土した土器は小片であり、詳細な時期は決定できない。

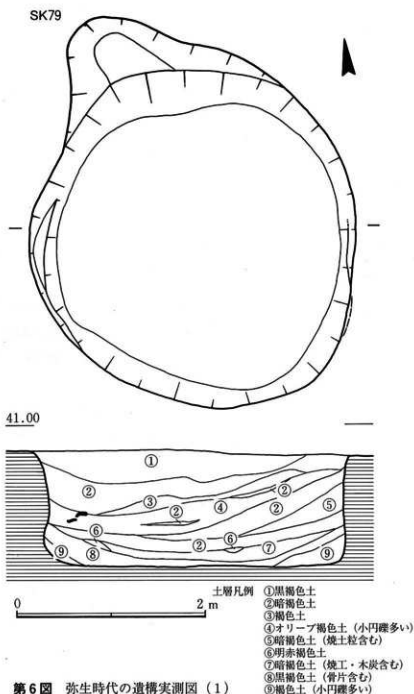
SK90 不整形の土坑であり、詳細な時期は決定できない。

SK06 調査区南西部に孤立して存在する。底面は3段に掘り込まれている。土層は暗オリーブ褐色土の単層である。

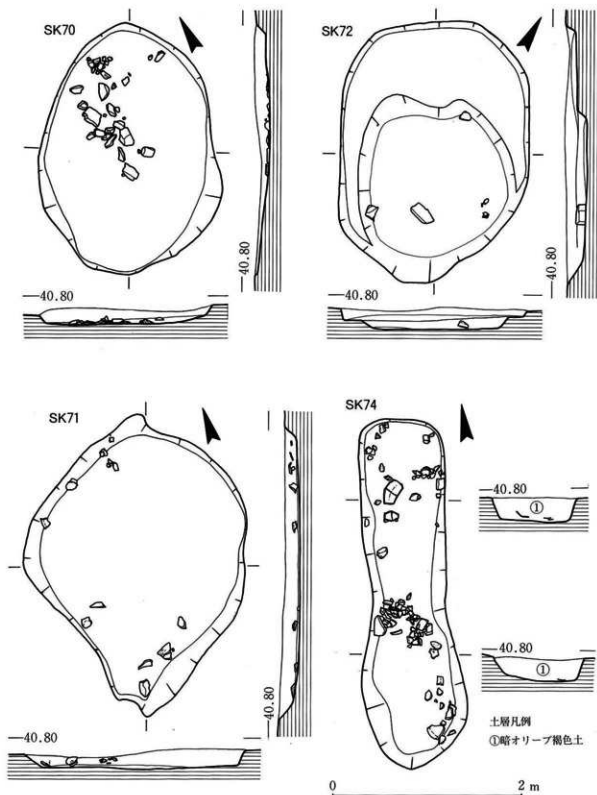
SK80 底面は2段に掘り込まれる。埋土中から折損した磨製石斧が出土した。

柱穴

建物を復元できなかったが、石斧未製品（第20図31）を出土したSP01、石斧を出土したSP05、埋土中に土器が投棄されていたSP04およびSP02などがある（第18図6・7、第19図）。



第6図 弥生時代の遺構実測図（1）



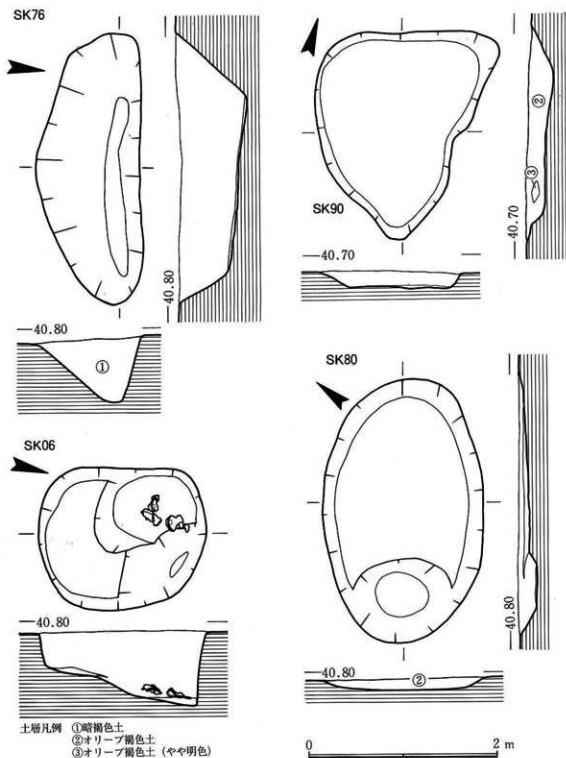
第7図 弥生時代の遺構実測図(2)

(2) 中世・近世の遺構

16～17世紀の掘立柱建物跡、溝、土坑、埋甕などが調査区のほぼ全域に分布する。

掘立柱建物跡 (第9図)

今回の調査では多くの柱穴を検出したが、これをもとに復元できた掘立柱建物はわずか3棟であった。

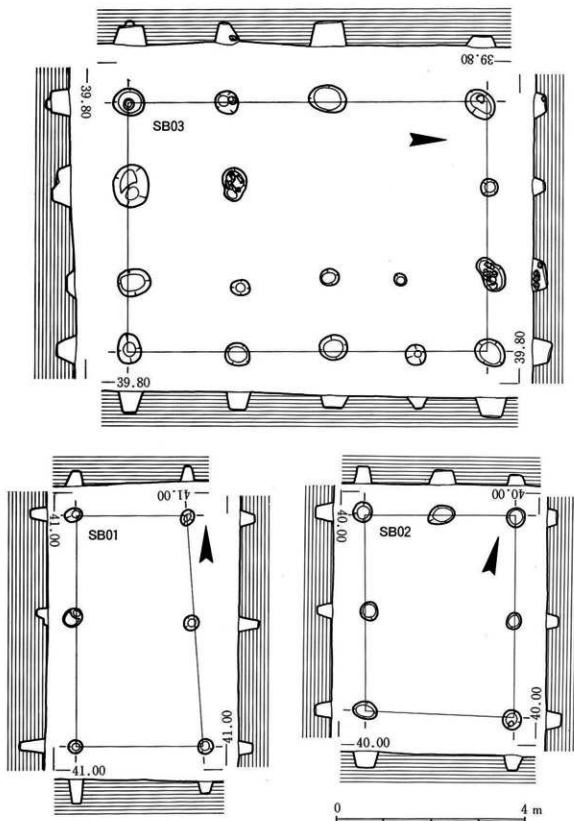


第8図 弥生時代の遺構実測図(3)

SB01 1間×2間の建物である。桁行4.9m、梁行2.4~4.9mで、桁行の軸方向はN2°Wである。柱穴からは土師器片が出土しており、近世の遺構と考えられる。

SB02 1間×2間の建物である。桁行4.6m、梁行3.2mで、桁行の軸方向はN15°Wである。柱穴からは陶器片・土師質大甍片が出土しており、近世の遺構と考えられる。

SB03 3間×4間の建物である。桁行7.6m、梁行5.3mで、桁行の軸方向はN2°Wである。柱穴からは遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、SB01と軸方向が同一であるため、同様の時期

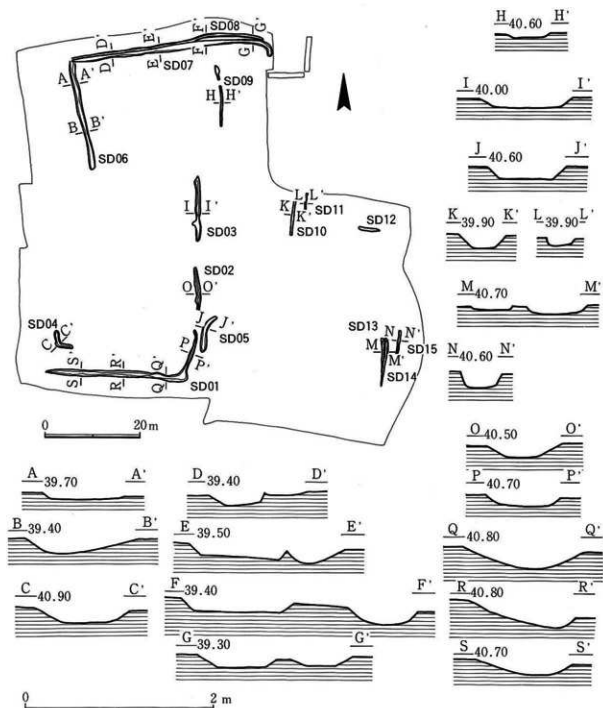


第9図 掘立柱建物実測図

が想定できる。

溝 (第10図)

今回の調査で検出された溝は15条である。そのほとんどは後世の削平を受け、遺存状態が悪く、遺



第10図 溝断面実測図

物も少量であった。このため時期決定ができる溝は4条のみであり、いずれも近世の遺構である。

SD06 時期不明の直線的な溝である。SD07・08との先後関係は明確でない。

SD07・08 重なり合うように東西に延びる直線的な溝である。時期不明であるが、土層観察の結果SD08埋没後にSD07が掘られたことが判明した。いずれもオリブ褐色土の単層である。

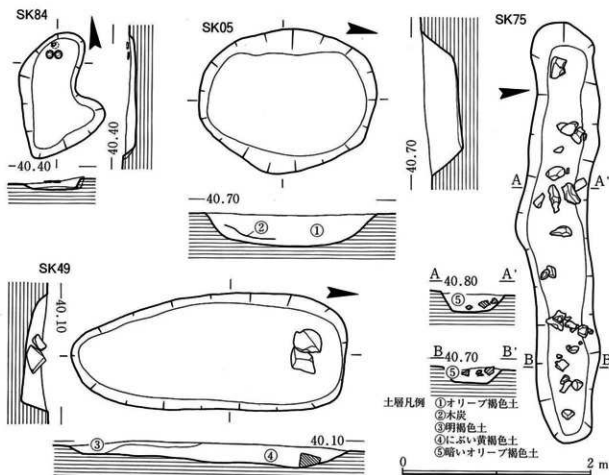
SD09 わずかに掘り込みが認められる近世の溝であり、埋土は砂および小円礫である。

SD03 直線的な近世の溝である。幅や軸方向の違いから、SD01・SD02とは直接関連しないものと考えられる。

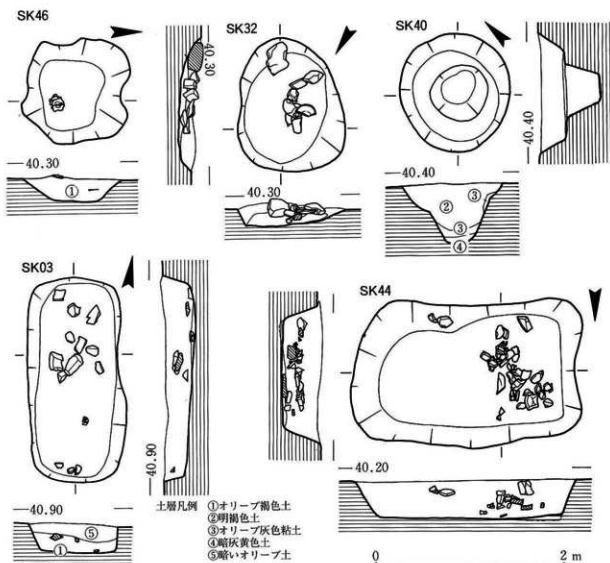
SD02 SD01の延長上にある溝である。17世紀の遺物が出土しており、SD01と一連の遺構である可能

表1 主な土坑一覧

遺構 番号	規 模			出土遺物	時 期	遺構 番号	規 模			出土遺物	時 期
	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
0 3	205	95	36	陶器片	近世	4 0	123	111	63		中世～近世
0 4	176	150	17	すり鉢の底部	16C	4 4	230	150	45		近世
0 5	182	143	33		中世	4 6	126	113	21	花形皿	近世
0 6	180	150	85	弥生土器	弥生前期末～中期前半	4 9	297	121	23	青磁片、縄文土器片	中世
0 7	442	192	44		近世	5 2	255	212	24	李朝製陶	近世
0 8	—	—	10	磁器片	18C	7 0	282	187	12	弥生土器片	弥生中期
1 4	182	174	59		中世～近世	7 1	312	235	20	弥生土器片	弥生前期末～中期前葉
1 5	62	53	7		中世～近世	7 2	279	201	22	弥生土器片、鉄器片	弥生中期
1 6	—	34	26		中世～近世	7 4	368	88	29	弥生土器片	弥生中期前葉～中葉
1 7	82	—	32		中世～近世	7 5	440	76	15		中世
1 8	(104)	(80)	32		中世～近世	7 6	286	111	70	弥生土器片	弥生中期
1 9	(76)	(68)	62		中世～近世	7 9	350	348	124	弥生土器片、石鏡	弥生中期
2 0	(124)	(102)	62		中世～近世	8 0	280	172	28	弥生土器片、石斧	弥生中期
2 1	60	57	13		中世～近世	8 4	266	127	14	土師皿	中世
2 2	350	78	39	大甕片	中世～近世	9 0	227	149	27	弥生土器片	弥生中期
3 2	146	131	13	陶器皿	近世						



第11図 中世の土坑実測図



第12図 近世の土坑実測図(1)

性が高い。

SD01 L字形の溝であり、東西・南北を意識して掘られたとみられる。溝は総延長約40m、上端幅0.4~1.3m、最も深い部分で38cmである。出土した肥前陶磁器(第21図55~58ほか)は16世紀末から17世紀前半にかけての遺物であり、遺構が半世紀程度存続した可能性がある。

土坑(第11~14図、第1表)

出土遺物により時代の明らかなもののうち、中世ないし近世に属するものは総数32基である。ほとんどが調査区南西部に集中しており、数基が重なり合う例もある。

SK84 土師器皿3点が上向きで置かれていた。棺の痕跡はないが、墓の可能性はある。

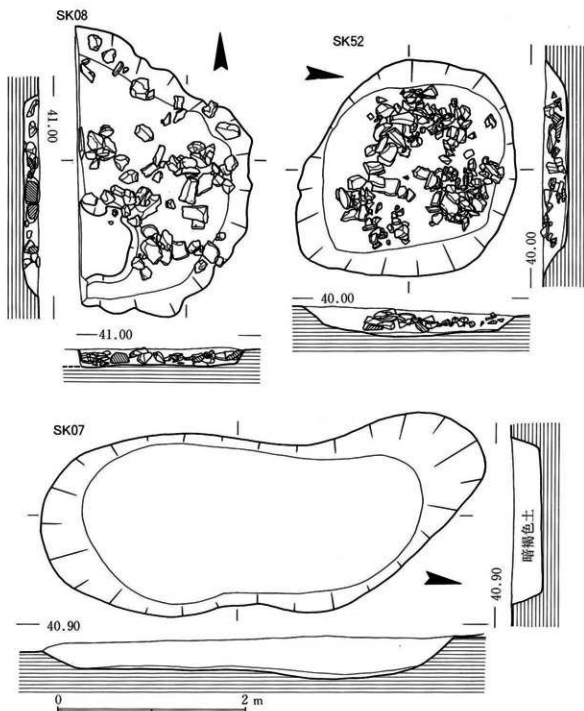
SK49 13~14世紀の遺構と考えられるが、埋土に縄文土器片(第17図ほか)を含んでいた。

SK75 溝状の遺構である。埋土に角礫を多く含んでいた。

SK46 埋土上位から青緑釉の陶器輪花皿(嬉野町・内ノ山窯)が出土した。

SK40 底面は2段になっており、最下層は粘土である。遺物は出土しなかったが、SK17(17世紀前半)と近似する。

SK03・44 平面が長方形の土坑である。規模や形態から墓の可能性のあるものの、人骨・副葬品や



第13図 近世の土坑実測図(2)

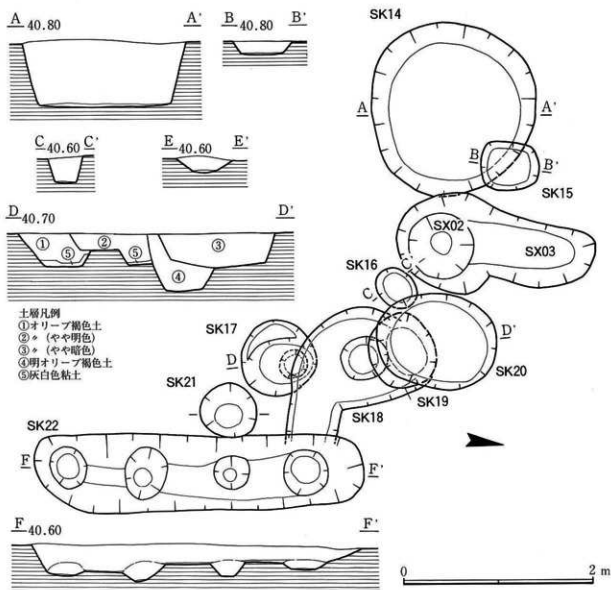
棺の痕跡は確認できなかった。なお、SK44の埋土は暗褐色土の単層である。

SK08・52 埋土に多量の礫を含む例である。SK52は埋土に鍛冶滓とみられるスラグを含んでいた。

SK14～22 (第14図)は切り合いをみせながら群在する土坑である。SB01の北に隣接しており、これらのうちのいくつかは建物に伴うものであろう。

SK14 SK15・SX02に切られる。土層は上下2層に分かれ、上層は暗オリーブ褐色土、下層は暗褐色土であり、水平堆積に近い。埋土にはほとんど遺物を含んでいない。

SK17・18 最下層に灰白色の粘土を敷く土坑である。SK17は粘土層上面に底面径約20cmの円形の凹みをもつ。この凹みは大甕底部の形状にはほぼ一致しており、SK17が埋甕遺構であった可能性もある。



第14図 SK14～22実測図

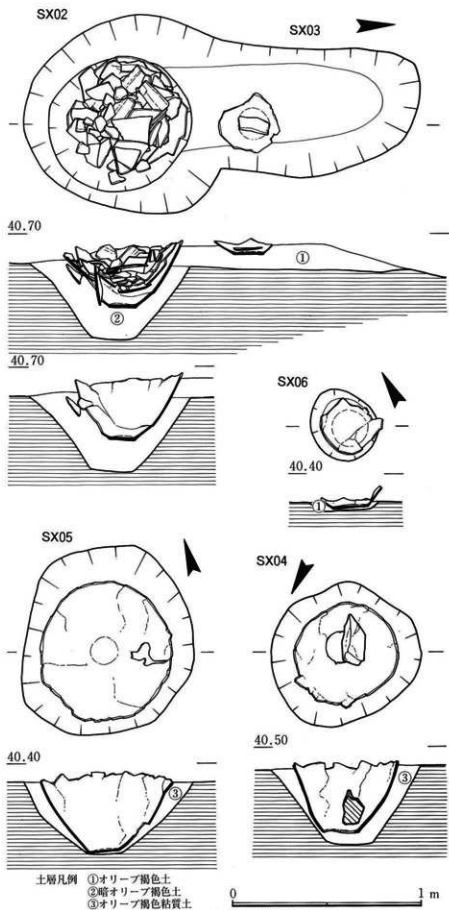
このことから、SK18も同様の遺構と考えることができよう。SK17～20は土層断面から明らかなようにSK17、SK18、SK19、SK20の順に掘り込まれている。SK18からは小片ながら、17世紀前半の肥前磁器が出土している。

SK22 溝状の土坑で、底面の4か所に円形の掘り込みがある。類例は一条谷朝倉氏遺跡や根来寺坊院跡などにみられる。埋土中に大甕の破片が含まれており、埋壺遺構の甕が抜き取られたものと考えられるが、ここでは断定を避けて土坑として扱う。埋土はオリーブ褐色粘質土の単層である。また、遺構検出の時点でSK22がSK18を切って掘り込まれていることが確認された。

埋壺遺構 (第15図)

大甕が原位置を保って遺存した埋壺遺構は5基である。いずれも在地の土師質または瓦質の大甕を用いている。確実な共存資料をもつものはなく、時期を明確にできないが、この種の大甕は近世遺物として認識されてきたものである。

SX02 大甕の上半部が下半部の中に投棄された状態で発見された。大甕はほぼ完形に復元が可能で



第15図 埋甕遺構実測図

あった。おそらく、隣接するSX03を構築する際に埋め戻されたのであろう。

SX03 底部のみが原位置を保っていた。遺構検出の段階で同一個体の口縁部片が出土しており、大甕は図上復元が可能であった。

SX06 底部のみが原位置を保っていた。

SX05 大甕下半部が遺存したが、器体の一部を欠いており、液体の貯蔵には不適当な状況であった。大甕内の埋土は灰オリブ土の単層である。

SX04 大甕下半部が遺存したが、底部を欠いていた。湧水はみられず、井戸等の用途は想定できない。大甕内の埋土は暗オリブ褐色土の単層である。

祭祀遺構 (第16図)

SX01は直径約60cm、深さ約8cmの小土坑であり、南端は柱穴によって切られている。土坑底面からは、土師器の皿1点・杯18点が重なりあって出土した。これらの土器は、上向きに置いた皿を中心に、

数枚単位で杯を重ねて集積したような状況であった。何らかの祭祀的行為のち、使用した器を埋納したものと推定される。杯は橙色を基調とするもの（第16図網かけ部分）と白色を基調とするものがあり、両者は使い分けられていたようである。瓦質の鍋脚部片以外に共伴遺物はない。

2 遺物

縄文・弥生時代の土器・石器と、中世・近世の土器・陶磁器などがある。

(1) 弥生時代以前の遺物

縄文土器（第17図）

いずれも縄文時代晩期の土器であり、中世の土坑（SK49）埋土から発見された。1・4は精製土器浅鉢であり、器表は磨滅している。2・3は粗製土器深鉢であり、内外面に条痕がみられる。5は底部であり、条痕がみられる。

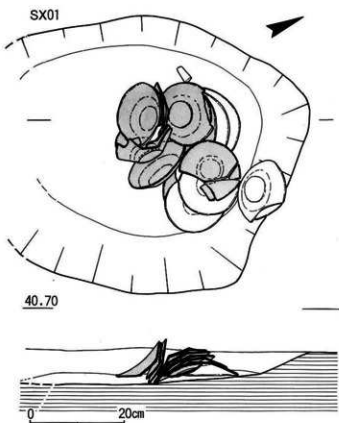
弥生土器（第18・19図）

中期・後期の土器が出土している。第18図には中期、第19図には後期の土器を示した。

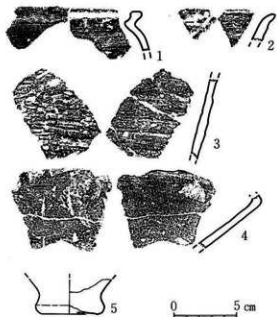
6は壺口縁部であり、器表は磨滅している。7は壺体部である。器壁が厚く、内外にミガキがみられる。9は大型の甕である。口縁部は外面に刻みをもち、端部を折り返す。15は無頸壺である。肥厚させた口縁端部の外面には水平方向に3条の沈線をもち、3本単位の縦方向の沈線が施される。また、口縁端部には焼成前の穿孔がみられる。16は壺体部である。上位に断面三角の、下位に断面M字状の凸帯を貼付る。18は甕底部であり、焼成後に内外から凹ませている。穿孔途中であろうか。19は図上復元である。21・22は同一個体の可能性がある。

石器（第20図）

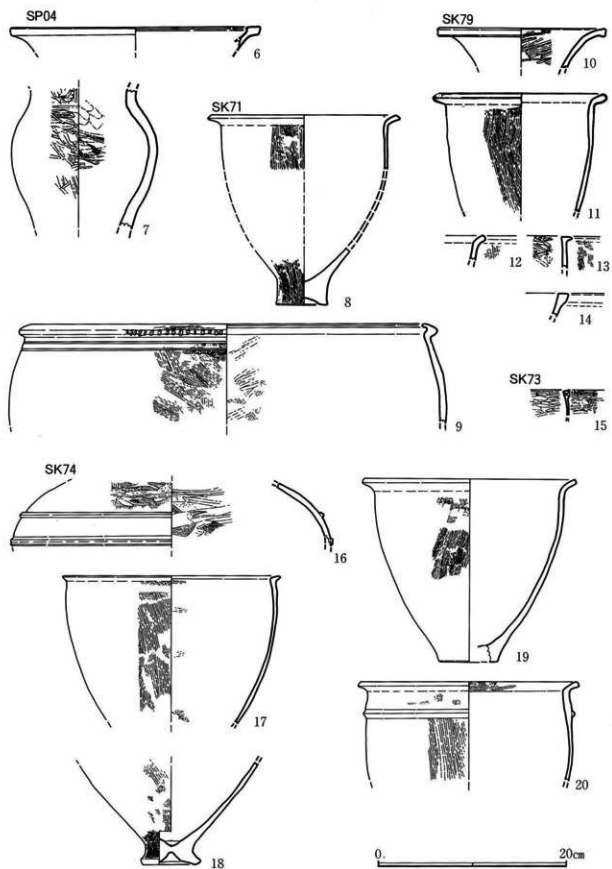
23～26は打製石鏃である。23は灰色黒曜石製、他は安山岩製である。27は円礫の片面を加工したものである。28は翼状の剝片であり、二次的加工はみられない。29は石核であり、縦長の石刃を剥ぎ取ったのち、蔽打器として使用したものとみら



第16図 SX01土器出土状況図



第17図 縄文土器実測図

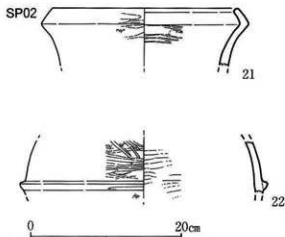


第18图 弥生土器实测图(1)

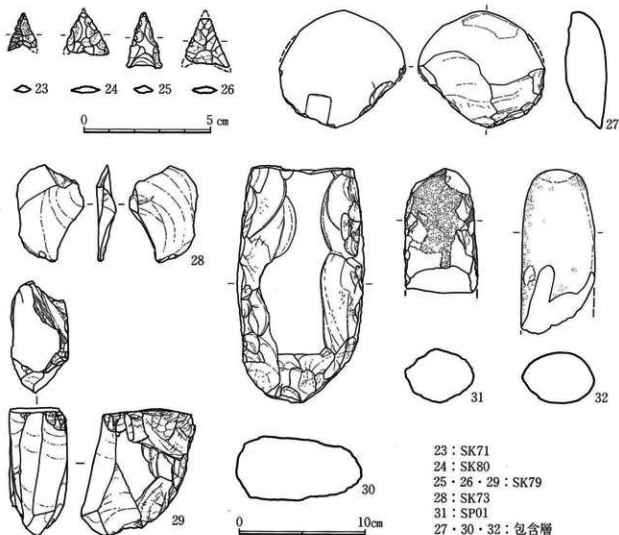
れる。30・31は石斧未製品である。30は荒削りの段階であり、31は敲打の段階で折損したものである。他に2点の石斧未製品が出土している。32は石斧完成品が折損したものである。石材は27は泥岩、28～32は砂岩を用いる。

(2) 中世・近世の遺物 (第21・22図)

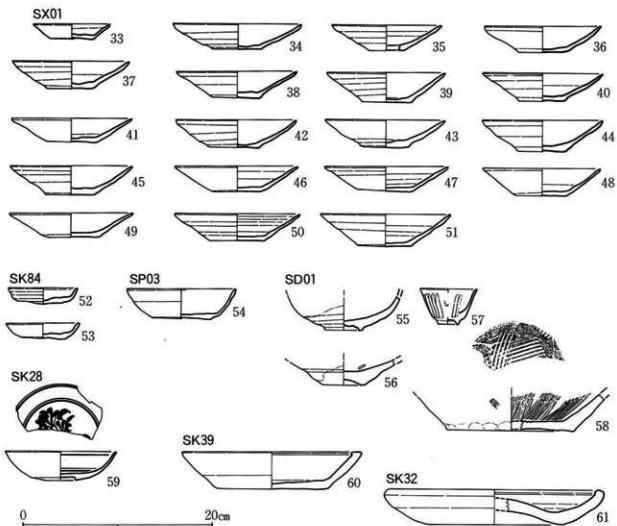
33～51は土師器皿1点、土師器杯18点からなる一括資料である。灰橙色を基調とする赤色系のもの(33～45)と、灰白色を基調とする白色系のもの(46～51)がある。赤色系は白色系に比して器壁が厚く、硬質である。杯の形態も、赤色系がやや丸味をもつものに対して、白色系は直線的である。杯の計測値の平均は赤色系では、口径・底径・器高それぞれ12.7cm・5.2cm・2.9cmである。これに対し、白色系はそれぞれ13.2cm・5.6cm・2.9cmであり、法量的には白色系の方がやや大きい。



第19図 弥生土器実測図(2)



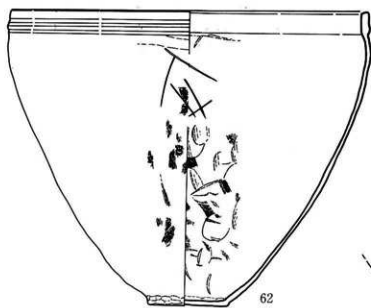
第20図 弥生時代以前の石器実測図



第21図 中世・近世の土器・陶磁器実測図

52・53は土師器皿、54は土師器杯である。55～58は溝の資料である。55・56は肥前陶器である。55は薬灰釉を施した岸岳系の碗であり、1580～1590年代の製品である。56は長石釉の陶器であり、見込に胎土目痕が残る。豊付には糸切り痕を残す。57は白磁小碗であり、外面の三方に「寿」字を染付けたものとみられる。1630～1640年代の製品である。58は瓦質土器描鉢であり、底部内面に罫目をもつ。59は景德鎮窯製の染付皿であり、釉の発色不良のために文様は不鮮明である。60は土師質の焙烙である。61は陶器皿である。焼成の際に焼き歪みを生じたものと考えられ、底部の内・外面には溶着がみられる。

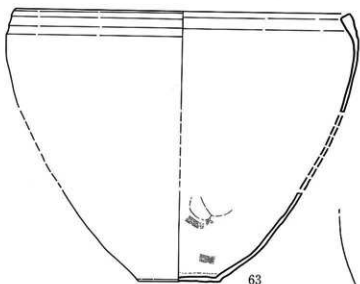
62～66は埋甕遺構に伴う大甕である。62は土師質、他は瓦質であり、いずれも内面は円形の叩きの痕跡を残す。62は内外ともハケによって調整する。外面の体部上位には浅い杖線によって記号様のものを表す。63・65は内外とも器表が磨滅している。64は内外とも器表をヘラ状の工具によるナデがみられる。66の外面は器表の剥落が著しいが、格子叩きの痕跡を残す。



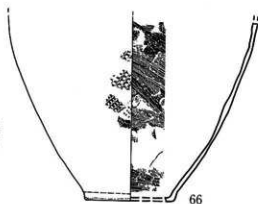
62



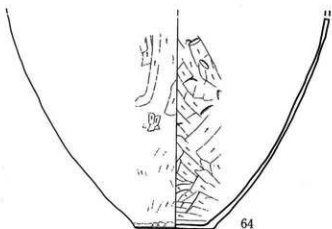
65



63



66



64

62 : SX02
 63 : SX03
 64 : SX05
 65 : SX06
 66 : SX04

0 40cm

第22图 大亮实测图



第23圖 鍛冶屋敷遺跡遺構配置圖

Ⅳ 鍛冶屋屋敷遺跡の調査

1 遺構

遺構は、水田の耕土と盤土を取り除いた面から検出した。本遺跡の所在する地は、上田部地区の北端に近く、南端の山地から発する小河川の形成した扇状地の扇端部に当たる。

今回の発掘調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟、土坑42基、溝17条、柱穴約670個、井戸2基その他である。

調査区は、現在の水路によって2分され、東側地区は地盤が安定しており遺構の密度が高いのに対し、西側は礫が堆積する部分もあって全般に地盤が安定せず、遺構の密度は低い。主だった遺構はすべて東側に存在した。

(1) 弥生時代の遺構

SK23 この遺跡唯一の弥生時代の土坑である。長軸が約350cmと、かなり大きい、深さは約20cmと浅い。弥生土器片(甕・壺)がかなりまとまって出土した。

(2) 中世・近世の遺構

掘立柱建物跡

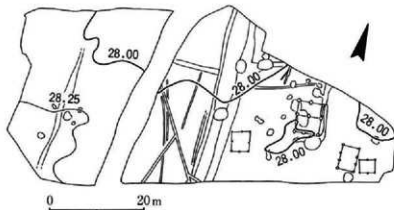
調査区東側では、多くの柱穴を確認できたが、掘立柱建物を復元することができたのはわずかに4棟のみであった。柱穴の大きさ深さとも十分なものも多かったが、後世の削平を受けているためか、それ以上確認することはできなかった。

SB02 2間×2間の建物で、棟方向はN7°Wであり、柱穴の規模も大きく、当調査区の中では比較的大きな建物であったと推測される。なお、土師器及び備前焼の陶器片が、柱穴から出土した。これらの遺物から、この建物が建っていた時期は、15世紀頃と推測される。

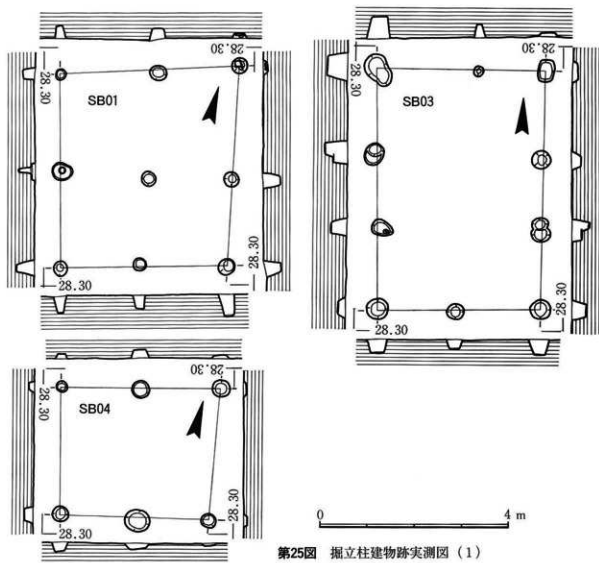
溝

水路をはさんで西側の調査区中央に1条(15世紀?)、東側の調査区に16条の溝を数える。特に東側の調査区西側には、幅約30cm、深さ約10cmの細い溝が南北あるいは東西に9条見られるが、時代は、出土遺物から見て17-18世紀と思われる。ただその内の1条は十数年前に掘られた現代の暗渠で、瓦を2枚合わせて水の流れるトンネルにするといった丁寧なつくりのものであった。実際、発掘調査中雨が降って水が湧き、排水に苦慮したことがあり、この暗渠の重要性を認識することとなった。

SD09 東側の調査区西側を南北に走る幅約200cm、深さ約25cmの溝で、断面の



第24図 鍛冶屋屋敷遺跡遺等高線測量図



第25図 掘立柱建物跡実測図(1)

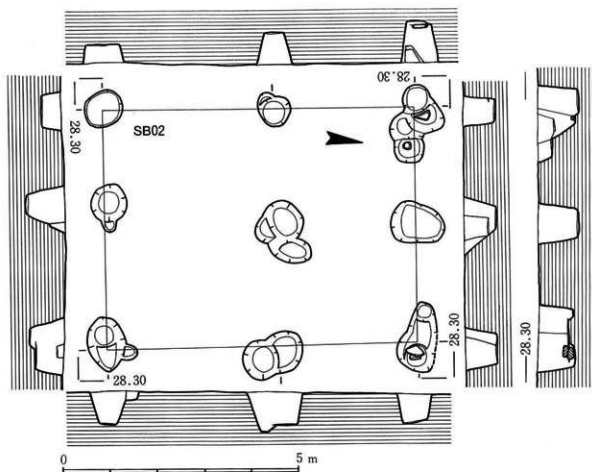
形状はU字形を呈している。調査区の北端で枝分かれしてさらに東に延びているが、調査区外になるため、その全容を明らかにすることはできなかった。16世紀頃と思われる。

SD15 調査区東側中央を南北に走る、幅約150cm深さ約40cmの溝で、長さは、調査区内で4.5mである。南の端は、SD16と接し、西南にSB02があり、この遺跡の中で最も遺構の密度が高い場所にある。この溝から美濃焼の陶器片が出土しており、それらから類推すると、この溝が掘られたのは16-17世紀であろう。

井戸

東側の調査区で2基の井戸を検出した。一つは、調査区の東南に位置する石組の井戸で、もう一つは、SD09に接する木組の井戸である。

SE01 東側の調査区東南に位置し、直径が約200cmのほぼ円形の井戸である。石組は中ほどから底にかけて残っており、上半分は井戸を埋めるときに壊したものと思われる。なお、その時割れた茶碗なども同時に投棄したようである。したがって、出土遺物は、肥前系の陶磁器や播鉢、土師質の大甕、丸瓦、茶臼などの破片など多数に及んだ。



第26図 掘立柱建物跡実測図(2)

SE02 SD09の中央付近、溝の端を切って掘り込まれていた。直径は約300cm、深さは約170cmに達し、底には木の枠がしてあったらしく、木材が埋まり、それを支えるように直径約4～5cmの杭(残部約70cm)がさしてあった。底のほうは小石混じりの粘質土が堆積し、水はしみだすように湧いてきた。出土遺物は、土師器及び土師質の甕または鍋、滑石の鍋、白磁の破片などである。また、完形に近い蛤刃の石斧も出土した。

土坑

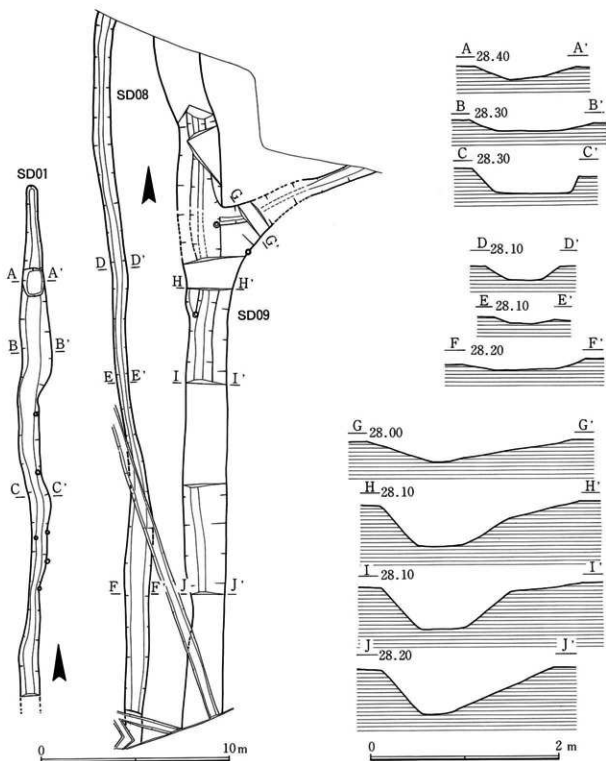
土坑は、調査区東側中央、南北に帯状に集中している。多くの土坑からは、15～16世紀の土器や、陶磁器の破片が出土し、土坑が掘られた時期もその時代に相当するものと考えられる。出土品は、ほとんどが生活に密着したもので、まさに中世の庶民生活を知る上で貴重な資料を得ることができた。土坑の平面形は、円形ないし楕円形がほとんどである。

SK01 土師質の鍋片がかなりまとまって出土した。しかし、復元することはできなかった。土坑自体は、長軸が約135cmほどの楕円形の浅い土坑である。

SK07 SD09と切りあいが見られ、その状況から溝が埋められた後、土坑が掘られたようである。

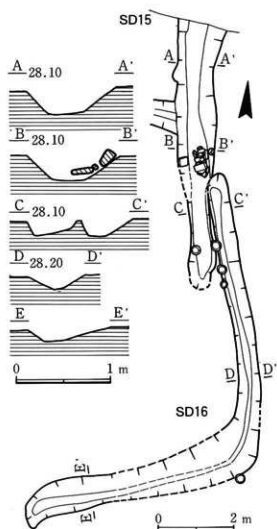
SK08 かなり密度の高い集石が見られた。SD09のすぐそばにあり、当初この溝の一部分かとも考えられたが、単独の土坑であると判断した。

SK09 SK08と同様、SD09の一部かと考えられたが、単独の、溝が埋められた後に掘られた土坑と判断した。やはり密度の高い集石がみられる。



第27図 溝実測図(1)

- SK10 浅い土坑であったが、蓋状の滑石製品が出土した。
- SK11 瓦質の播鉢が出土した。また、集石も見られた。
- SK18 瓦質の甕・播鉢、土師質の鍋・播鉢などが出土した。
- SK19 長軸が約281cm、深さ約60cmの楕円形の土坑である。白磁の染付碗片、瓦質の香炉片、筭、茶臼の一部などが出土した。
- SK27 長軸約300cmに及ぶ楕円形の土坑である。SD16とつながっているが、その関係は不明である。

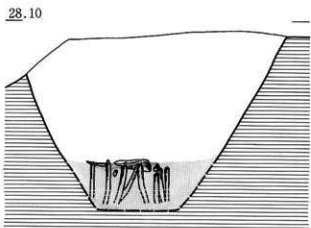
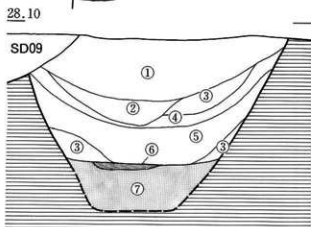
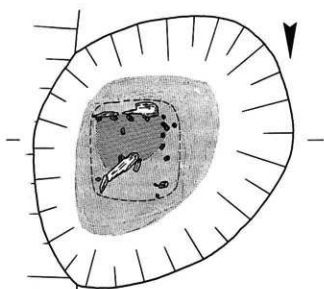


第28図 溝実測図(2)

遺構の中には大小さまざまな石が見られ、中には明らかに人工的な加工を受けているものもあった。なお、瓦質の甕及び播鉢の破片が出土した。

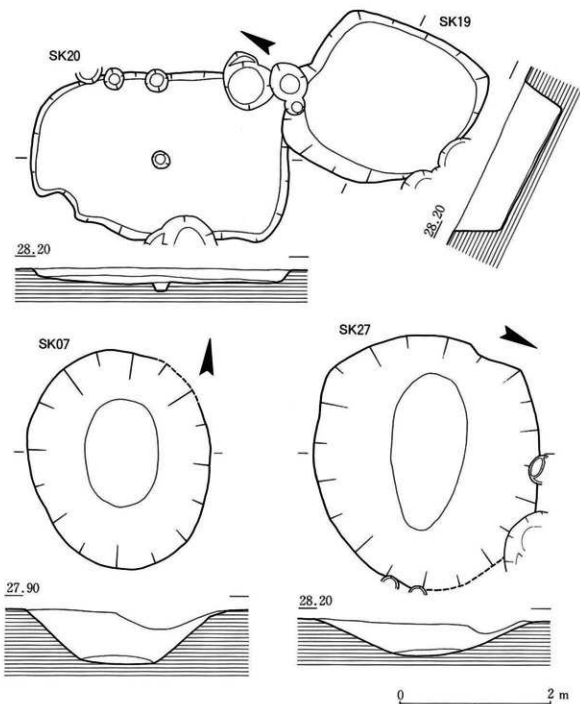
柱穴

柱穴は、約670個を数えたが、そのうち遺物が出土したもののみに簡単にそれを記す。SP01は、割れてはいたがかなり残度の高い土師器杯が出土した。SP02も同様の土師器杯が出土した。SP03は茶白片が出土し、他の遺構から出土した破片と合致した。SP04は集石がみられ、SP05からはSK10と同様の蓋状の滑石製品が出土した。



- 土層凡例
- ① 暗褐色土 (礫を多く含む)
 - ② 暗褐色土 (やや暗色)
 - ③ 暗褐色土
 - ④ 暗褐色土
 - ⑤ 暗褐色粘質土
 - ⑥ 青灰色粘土
 - ⑦ 灰色粘土

第29図 井戸実測図

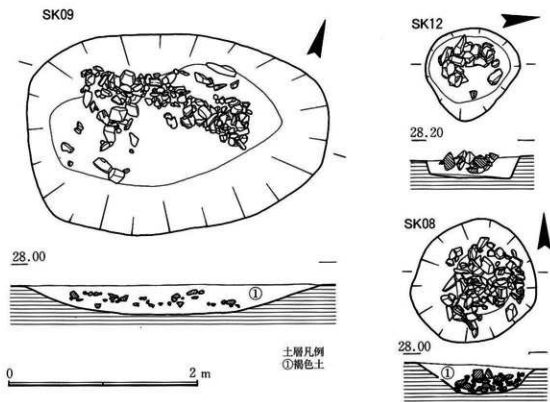


第30図 土坑実測図(1)

表2 主な土坑一覧

遺構 番号	規模 (cm)			出土遺物	時期	遺構 番号	規模 (cm)			出土遺物	時期
	長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ		
0 1	135	70	20	土師質の銅片	C	1 4	141	102	41	磁器(香炉)片	D
0 3	194	187	8	土師質の銅片	E	1 8	175	155		瓦質銅、鏝、鉢	F
0 4	102	86	11	土師器片	D	1 9	281	222	60	白磁片・香炉片	E
0 5	104	81	11	土師質銅片	C	2 0	340	220	22	弥生土器	A
0 7	293	241	72	瓦すり鉢	F	2 1	119	57	22	瓦質すり鉢	E?
0 8	146	132	13	土師質銅片・砥石	C	2 3	103	65	44	土師質銅片	E?
0 9	311	215	49	集石遺構		2 6	109	95	10	土師質瓦片	E?
1 0	229	78	17	滑石製品	C	2 7	340	300	47	集石遺構	F
1 1	157	135	46	土師器片・鉄器片	D	2 9	162	101	33	土師器片	D
1 2	95	67	20	土師器碗片	B?	3 0	75	75	35	土師皿	E?

A 弥生時代 B 12世紀 C 15世紀 D 15～16世紀 E 16世紀 F 17世紀



第31図 土坑実測図(2)

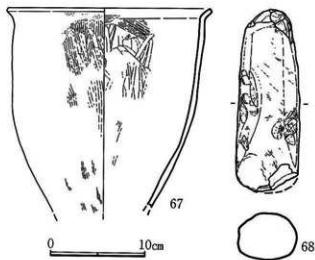
2 遺物

(1) 弥生時代の遺物 (第32図)

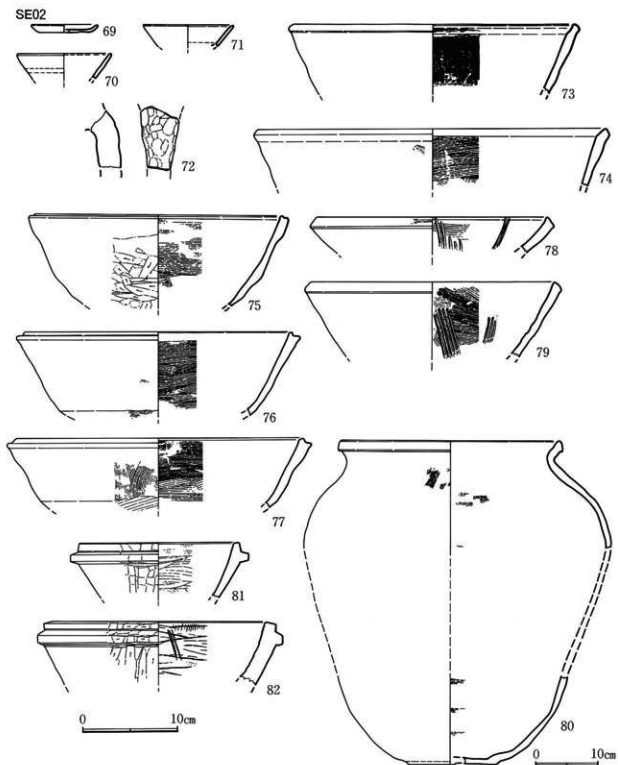
弥生土器および石斧が出土している。67はSK20出土の甕である。良好な共存資料がなく、復元可能な個体は1点のみであった。68はSE02埋土中から出土した磨製石斧であり、遺構に伴わない。鍛冶屋敷敷遺跡からは他に1点磨製石斧が出土しているが、未製品は発見されなかった。

(2) 中世・近世の遺物 (第33～36図)

SE02 第33図は井戸埋土中から出土した遺物である。69・70は土師器皿および杯である。71は白磁皿であり、口縁端部は無軸である。72は土師質の鍋または釜脚部片である。73～77は鍋であり、75は瓦質、他は土師質である。脚をもつものではなく、口縁部が短く外反するものおよび口縁端部に段をもつものがある。78・79は土師質の播鉢であり、備目単位はいずれも5条である。80は土師質の大甕である。外面は粗いナアによってハケを消している。81・82は滑石製石鍋である。81は内外とも平滑に仕上げられているのに対し、82は削り痕が顕著である。82については、分割・転用を意図したとみられる、縦方向の加工痕がみられる。



第32図 弥生時代の遺物実測図

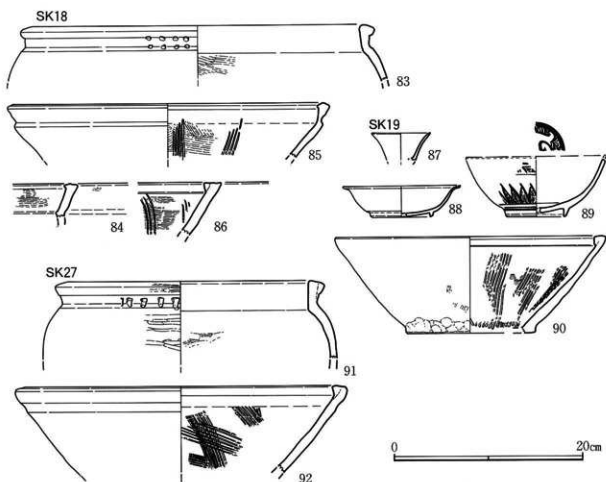


第33図 中世遺物実測図(1)

SK18 (第34図83~86) 83は甕、84は鍋、85・86は播鉢である。85は土師質、他は瓦質である。

SK19 (第34図87~90) 87は白磁小杯、88は白磁皿である。88は焼成不良のため、軸が白濁している。89は染付碗である。これら磁器はいずれも中国製とみられ、16世紀前半ないし中葉の製品である。90は軟質の土師質播鉢である。なお、この遺構からは破片ながら18世紀後半に属する陶磁器小片が含まれている。

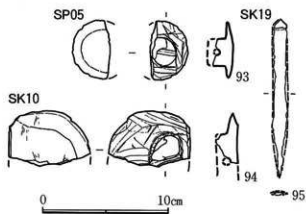
SK27 (第34図91~92) 91は甕、92は播鉢であり、いずれも瓦質である。92は放射状の櫛目に加え



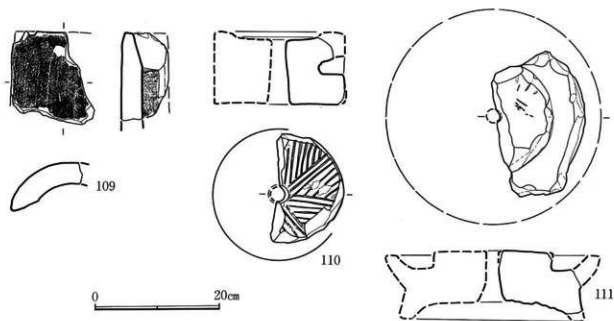
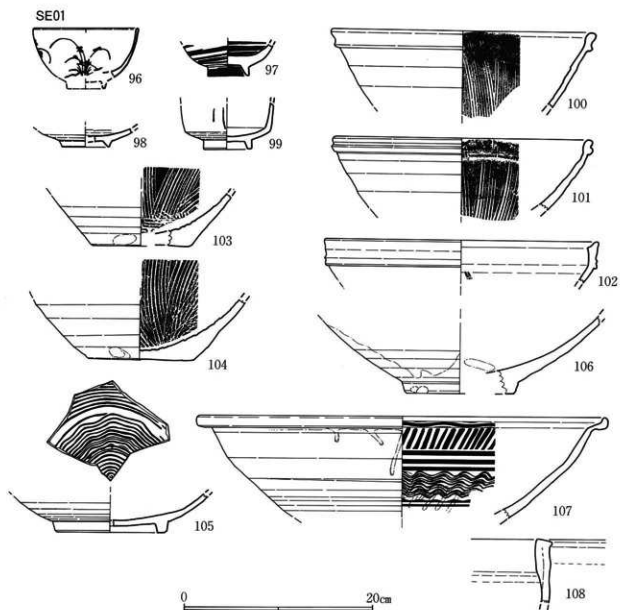
第34図 中世遺物実測図(2)

て、これに斜交する櫛目がみられる。

第35図93・94は滑石製品である。模造鏡に近似した形態であるが、共存遺物等から15～16世紀に属するものである。石鍋の再加工品とみられる。第35図95は錆化の著しい銅製品であり、筭とみられる。SE01(第36図96～111) 96は染付碗であり、外面に草分を描く。軸は白濁している。97は陶器碗であり、内外に刷毛目を施す。高台付は無軸である。98は染付皿である。見込は蛇の目軸刺ぎである。99は陶器火入である。内面は無軸で、煤が付着する。100～104は陶器挿鉢である。100～102は内外に施軸する。103・104は内外とも無軸であり、胎土目の痕跡を残す。105～107は陶器大皿である。内面には波状文を主体とする刷毛目の装飾が施される。106は軸が白濁しているものの、本来は刷毛目を意図したものである。107は刷毛目を施したのち、鉄軸を流しがけする。同一個体の破片には緑色釉を流しがけた部分があり、いわゆる二彩手である。108は土師質の大甕口縁部である。SE01から出土した陶磁器は17世紀後半から18世紀前半に属するものが主体であり、18世紀前半に限定される破片を含んでいる。109は丸瓦、110・111は茶白である。



第35図 中世遺物実測図(3)



第36图 近世遺物実測図

V まとめ

今回の発掘調査は、別個の2遺跡を対象として行われたが、結果的には近似した遺跡であることが判明した。以下、遺跡ごとに成果を整理してまとめたい。

土井ノ内遺跡

遺構は弥生時代中期ないし後期と、中世・近世の2時期のものが中心である。弥生時代の遺構は調査区で最も標高の高い地点に集中している。遺構は、いわゆる貯蔵穴1基を含んでいるものの、住居跡は発見されなかった。数点ではあるが、磨製石斧の未製品が出土している。石斧未製品の出土は田部盆地では5遺跡目であり、この地域が石斧生産の拠点であったことを追認する資料である。

中世・近世の遺構は調査区のほぼ全域に分布する。中心となる時期は16～18世紀であり、遺構数に比して遺物は少量である。17～18世紀の溝を伴う屋敷跡が確認され、埋竈遺構も存在する。遺跡名から想起される武士居館の存在は確認できなかった。

鍛冶屋敷遺跡

弥生時代中期の土坑が1基存在するものの、遺構は中世・近世（14～18世紀）のものが中心である。建物・井戸等の遺構は地盤の安定した調査区東半に集中しており、最も湧水点の高い調査区中央部分では南北方向の溝が卓越する。これらの溝は排水または区画を意図したものと考えられる。なお、金属加工関連の遺構・遺物は発見できなかった。

埋竈遺構について

両遺跡の調査を通して注目すべきものに、土井ノ内遺跡の埋竈遺構がある。土井ノ内遺跡には確実な埋竈遺構5基に加え、埋竈遺構の可能性が高い土坑4基（SK22・17・18・40）がある。本遺跡では埋竈遺構を内部にもつ建物を復元することはできないものの、SK22・17・18・SX02・SX03のように、近世の建物（SB01）に伴う可能性のあるものを含んでいる。埋竈遺構の用途については、藍甕・酒甕・油甕・水甕・食物貯蔵施設・便所などが考えられるが、今回の調査では用途を判別する資料を得ることはできなかった。地元の伝承のように酒造関連の遺構ととらえることも可能である。ただしSK11を埋竈遺構とするなら、この遺構は大甕4個を埋設したものであり、4個一組で使用される近・現代の藍甕に類似する。

山口県において埋竈遺構が確認された遺跡は本遺跡を含めて11遺跡であり、このうち5遺跡が山口盆地に集中する（第3表参照）。山口市・防府市以外では菊川町のみ知られている。この分布が何らかの歴史的背景をもつのか、調査密度の差によるものかは類例の増加を待って検討すべき課題である。

表3

	遺跡名	所在地	発数	備考
1	土井ノ内遺跡	豊浦郡菊川町大字上田部	5	抜き痕も
2	坂ノ上遺跡	豊浦郡菊川町大字上岡枝	2	同一土坑に
3	城山遺跡	山口市大字江崎	3	
4	小路遺跡Ⅱ	山口市大字黒川	1	
5	西遺跡	山口市大字黒川	2	常滑大甕使用
6	吉田遺跡	山口市大字吉田	5	
7	良君城跡	山口市大字大内矢田	13	半円形に配置
8	釜山遺跡	山口市大字仁保下郷	3	
9	桐ヶ谷・尾口山遺跡	山口市大字鑄銭司	1	
10	今宿西遺跡	山口市大字鑄銭司	1	
11	周防国街跡	防府市国街	1	



土井ノ内遺跡遠景（北から）



土井ノ内遺跡調査区全景



土井ノ内遺跡調査区 南東部



土井ノ内遺跡調査区 南西部



SK79 完整



SK72 土器出土状況



SK79 土層断面



SK70



左 上 SK71 土器出土状況

左 下 SP04 土器出土状況

右 SK74 土器出土状況





SB03



SK84 土器出土状况



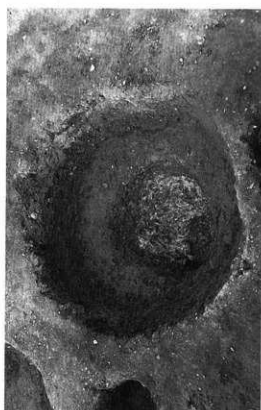
SB01



SB02



上 SK46 下 SK03 遺物出土状況



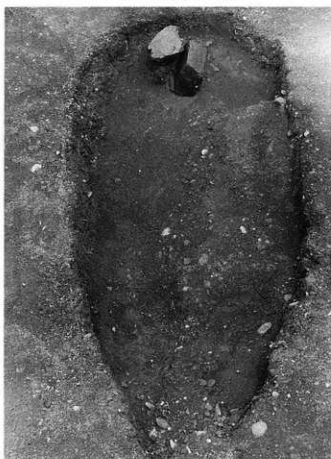
上 SK05 下 SK04 粘土層検出状況



SK32 遺物出土状況



SK44



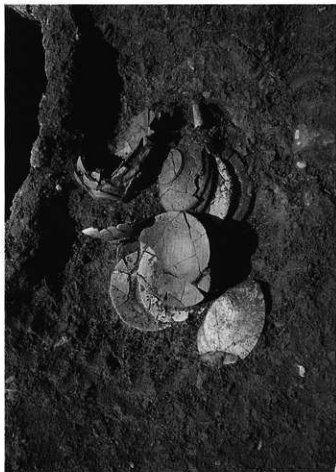
SK49



SK75



SK07



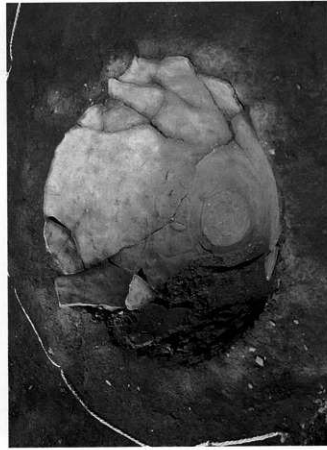
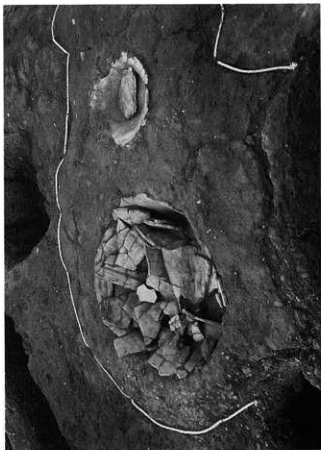
SX01 土器出土状況



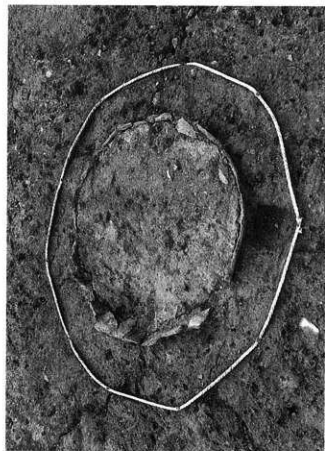
SK08



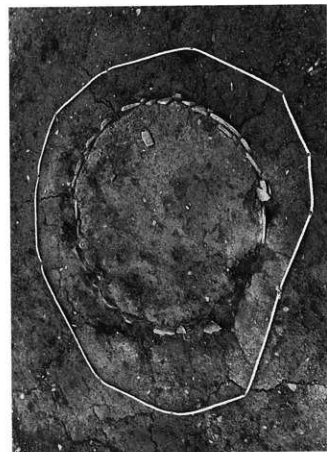
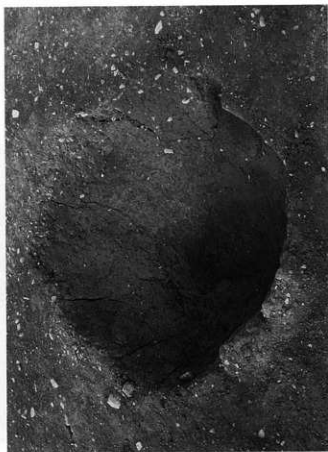
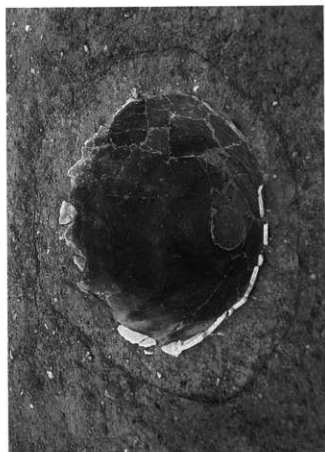
SK41



SX02·03 (左上 検出状況、右上 埋藏出土状況、左下 SX02埋藏)、右下 SX06 埋藏



SX04 (左上 検出状況、右上 埋藏出土状況、左下 埋藏断面状況、右下 完掘)



SX05 (左上 検出状況、右上 埋藏出土状況、左下埋藏断面、右下 完損)



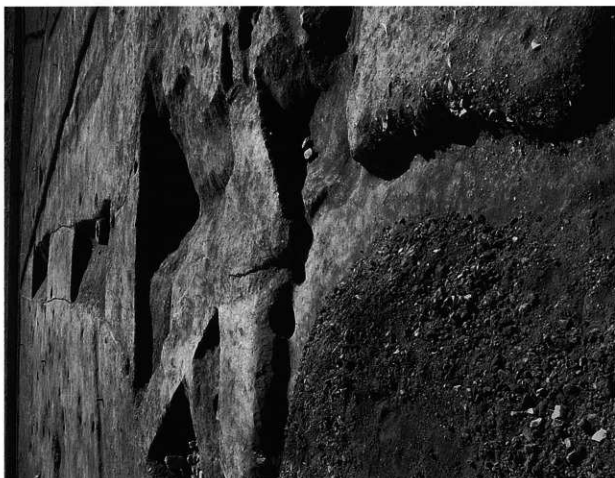
鐵冶屋屋敷遺跡遠景



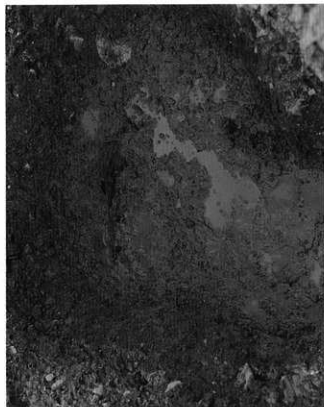
鐵冶屋屋敷遺跡調査区全景



SD09 (南から)



SD09 (北から)



SE02 (上 莞掘 下 木材出土状況)



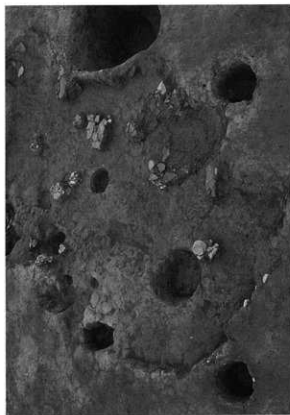
SE01 (上 土層 下 莞掘)



SK01



SK19



SK20



SK18



SK09



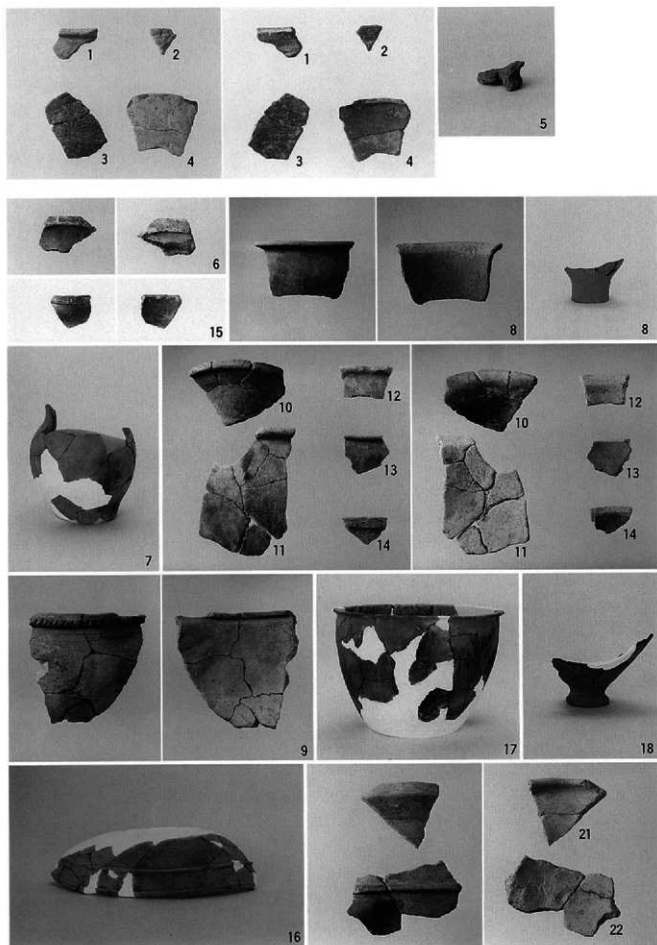
SK12



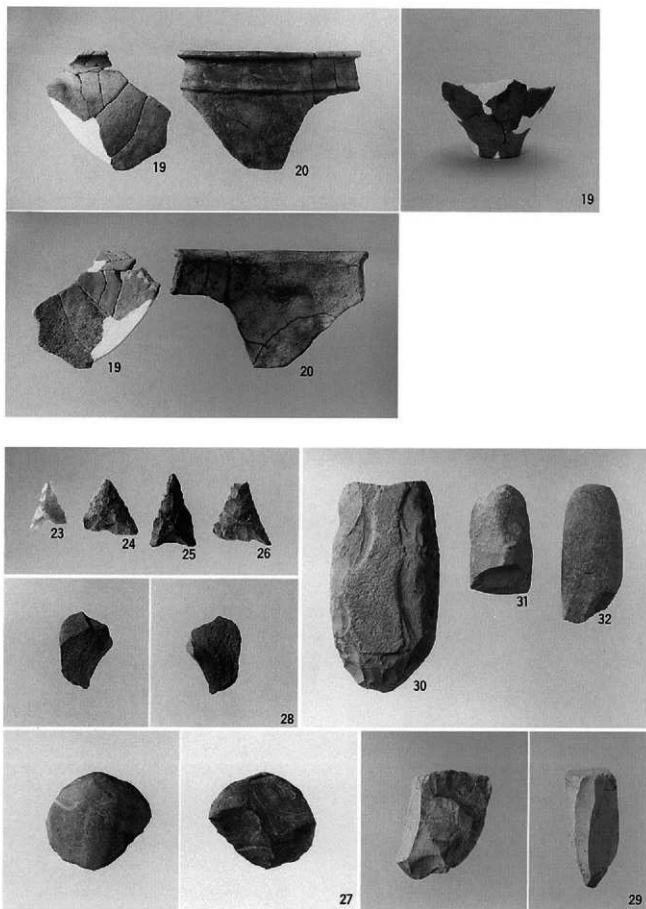
SK11



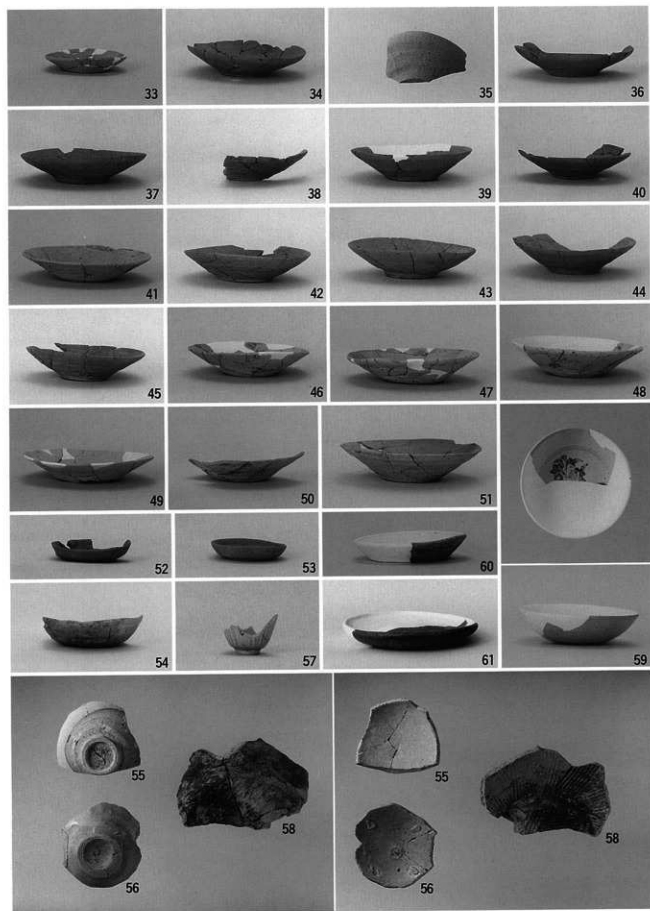
SK27



土井ノ内遺跡出土遺物 (1)



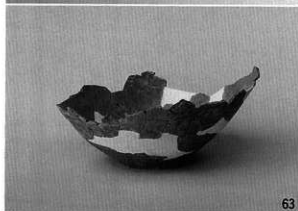
土井ノ内遺跡出土遺物(2)



土井ノ内遺跡出土遺物 (3)



63



63



65



64

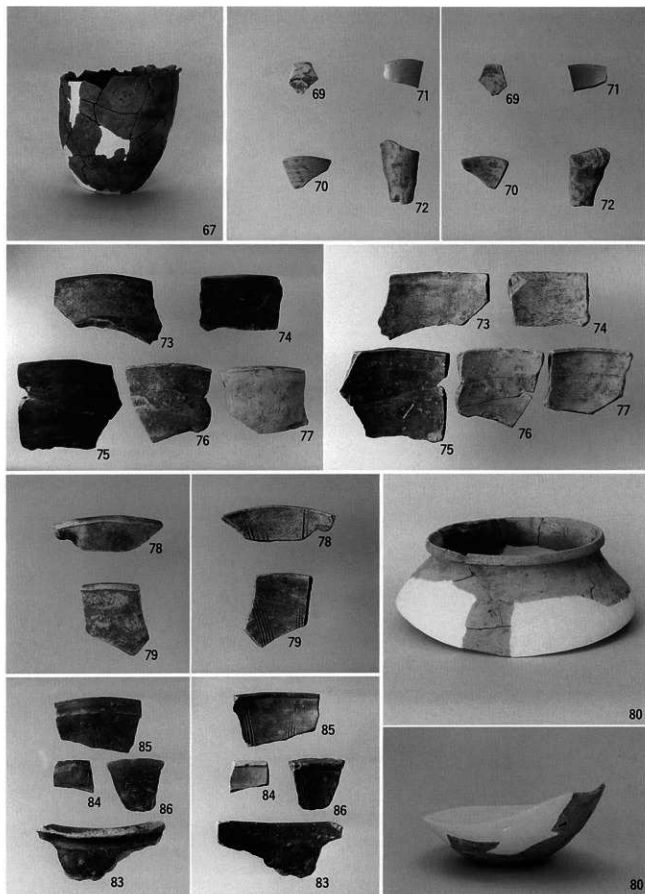


66

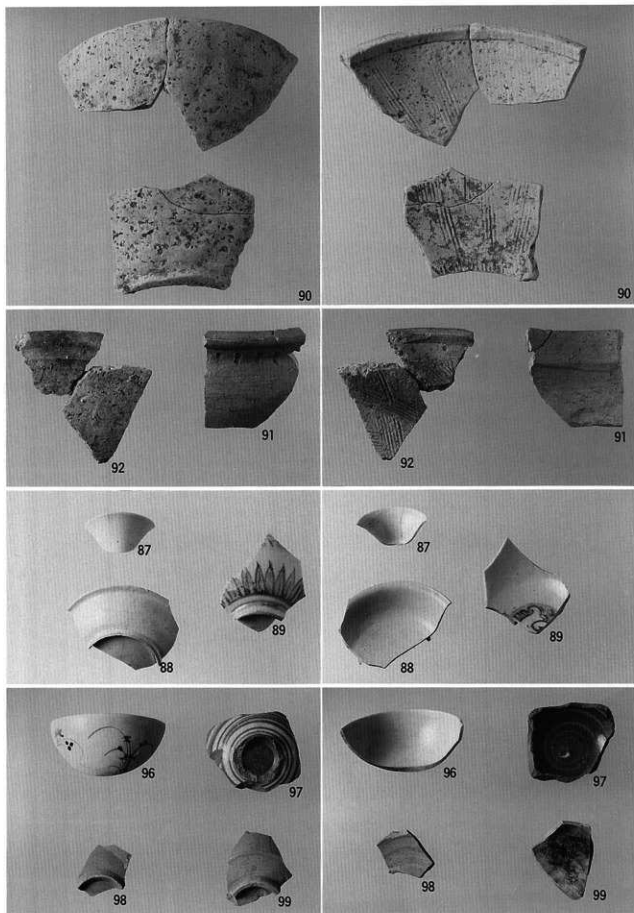


62

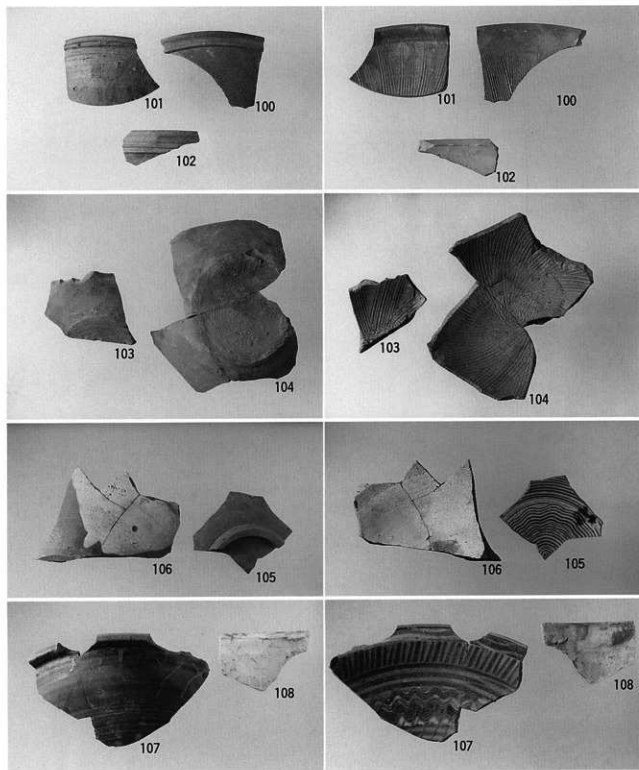
土井ノ内遺跡出土遺物(4)

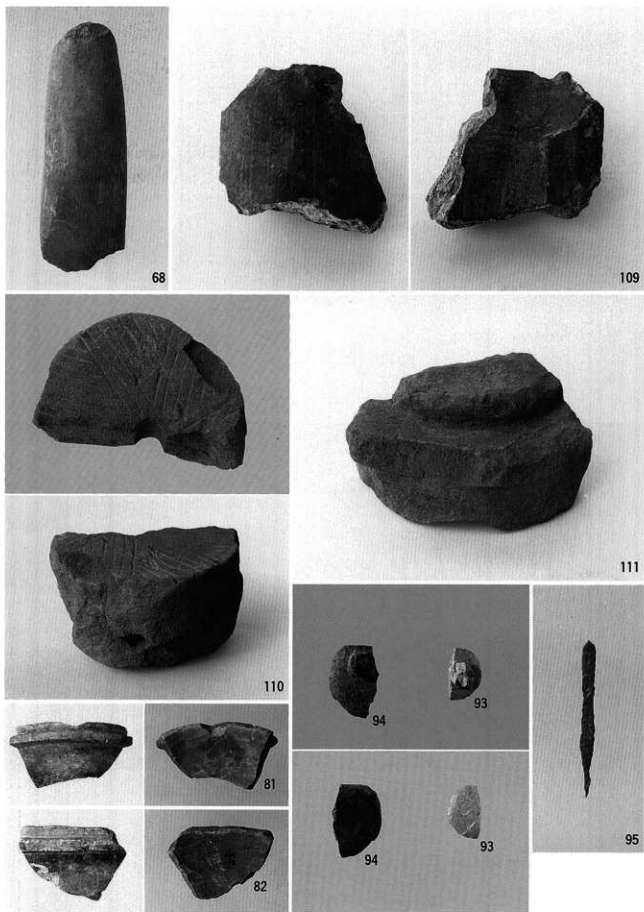


鍛冶屋敷遺跡出土遺物 (1)



鍛冶屋敷敷遺跡出土遺物 (2)





鐵冶屋塵敷遺跡出土遺物(4)

報告書抄録

ふりがな	どいのうちいせき・かじややしきいせき
書名	土井ノ内遺跡・鍛冶屋敷遺跡
副書名	平成6年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第177集
編著者名	寺田勝法・花岡隆義・岩崎仁志
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753 山口市春日町3-22
発行年月日	西暦1995年3月22日(平成7年3月22日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どいのうちいせき 土井ノ内遺跡	とようらでんきくがわちよう 豊浦郡菊川町 おおあきかたべ 大字上田部 あびのけのうち 字竹ノ内	35441		34° 6'12"	131° 1'40"	19940426 ～19941102	5,200	ほ場整備
かじややしき 鍛冶屋敷 遺跡	とようらでんきくがわちよう 豊浦郡菊川町 おおあきかたべ 大字上田部 あびのけのうち 字虎法師 あびのけのうち 字宮ノ馬場	35441		34° 6'30"	131° 1'40"	19940426 ～19941102	2,400	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
土井ノ内遺跡	集落跡	弥生時代	土坑	14基	弥生土器・石器 土師器・瓦質土器 ・陶磁器(国産・ 輸入)	
		中世	掘立柱建物跡	3棟		
		～近世	土坑	83基		
		埋溝	15条			
		瓦遺構	5基			
			柱穴	約1270個		
鍛冶屋敷遺跡	集落跡	弥生時代	土坑	1基	弥生土器・石器 土師器・瓦質土器 ・陶磁器(国産・ 輸入)・石製品	
		中世	掘立柱建物跡	4棟		
		～近世	土坑	41基		
		溝	17条			
		井戸	2基			
			柱穴	約670個		

山口県埋蔵文化財調査報告 第177集

土井ノ内遺跡・鍛冶屋屋敷遺跡

—平成6年度県営は場整備事業に伴う発掘調査報告—

1995年 3月

編集 財団法人山口県教育財団
(山口市大手町2130)
山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3-22)

発行 財団法人山口県教育財団
(山口市大手町2130)
山口県教育委員会
(山口市滝町1-1)

印刷 隣報社写真印刷株式会社
